

天然記念物深泥池水生生物群集の保全

2005年度から、本校理数科系の生徒を対象に、竹門康弘京都大学防災研究所准教授と深泥池水生生物研究会のご援助、ご協力を得て、深泥池の保全・活用をテーマに「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト(SPP)」の事業を行っている。SPPは、文部科学省が「『次代を担う人材への理数教育の拡充』施策の一環として、学校と大学・科学館等の連携により、児童生徒の科学技術、理科・数学(算数)に関する興味・関心と知的探究心等を育成することを目的とする事業」である。昨年度からは独立行政法人科学技術振興機構(JST)が実施母体となっており、同機構から年度50万円弱の補助をいただいている。 <http://spp.jst.go.jp/>



本年度は、竹門准教授と中井克樹滋賀県立琵琶湖博物館主任学芸員の講義、深泥池現地実習、「お魚の身体検査」実習、生徒研究発表会の5本立てである。



400kgのナガバオモダカ除去

今年の10月2日に実施した深泥池現地実習では、池の岸辺の底生生物の分布が環境によって大きく異なることがわかった。また、大繁殖して脅威となっているナガバオモダカ(北米原産)を約400kg(湿重)除去することもできた。深泥池水生生物研究会が捕獲した外来魚の同定計測実習(お魚の身体検査)の結果も合わせて、2月の生徒研究発表会で報告する予定である。

大きな成果

本校のSPP事業は、国指定天然記念物深泥池生物群集を対象とすることによって、「三方得」の大きな成果を上げつつあるのが大きな特徴である。

活用：高校生にとっては、天然記念物調査・保全という真剣勝負の研究に加わることができ、「理科大好き」生徒を増やすことができる。

研究：研究者にとっては、研究・保全のための貴重な基礎データが得られる。

保全：深泥池にとっては、その保全が推進される。

行政・研究者・一般市民が「三位一体」となっている、全国的にも注目を集めている深泥池の保全・活用事業が、若い力の参入によって、さらに充実したものとなってきている。

